

くじら日記

太地町立博物館から

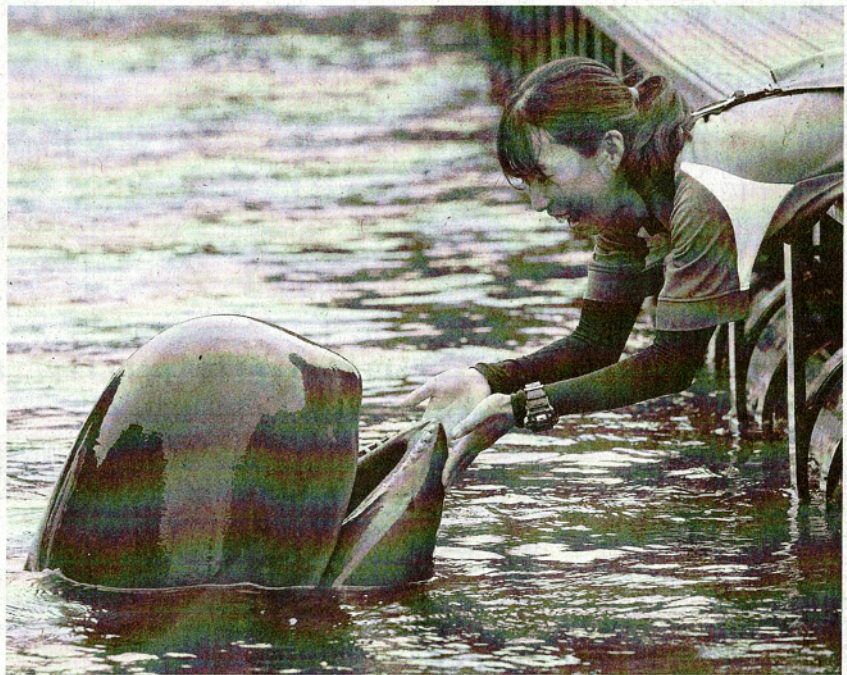


「トレーナーとシャチが会話をしているかのように見えた」。幼少期のある記憶をこう振り返るのは、鯨類飼育のチームリーダーを務める和田あやかさん(32)です。千葉県松戸市出身で、家族と訪れた鴨川シーワールド(同県鴨川市)のシャチのパフォーマンスに感銘を受けたときのことです。

日常で目にする動物とはかけ離れた鯨類の「存在感」、「大きさ」に驚かされ、いつしか「自分もそのトレーナーのようにになりたい」と思うようになったそうです。

平成23年、和田さんは動物の生態や飼育技術を学ぶために、専門学校に入学しました。修学を通して考えたのは、「どのように動物と関わりたいか」ということでした。思い立ち、一人で足を運んだのが、くじらの博物館でした。

飼育員の思い②



担当するクジラと接する和田あやかさん

入り江で暮らす鯨類の姿で、今まで見てきた水族館の印象とは違うものでした。海沿いを歩くと、1頭のおキゴンドウと目が合い、やがて自分を追うように泳ぎ始めたのです。「あっという間だったけ

れど、鮮明に覚えている」と、初めて鯨類と意識が通った出来事を振り返りました。卒業後、くじらの博物館に飼育員として加わりました。餌づくり、掃除、アナウンスなど、下積みの仕事でも動物

のことを思うと全く苦にならなかったそうです。飼育員として手応えを感じるようになったのは、それからしばらくたったのこと。「あの時」のおキゴンドウの背中に乗って、水面を滑走する「サーフィン」ができるようになった頃でした。「クジラは感情が豊かで、すれ違うこともある。けれど、意思の疎通がとれたときは、心が通じ合うかのような感覚」と当時のことを語りました。幼少期に憧れたトレーナーと自分が重なったことでしょう。

しかし、挫折もありました。担当している動物が、続けて命を落としたのです。「どうすることもできず、精神的に苦しかった」と言い、

「生まれたばかりのクジラの赤ちゃんが元気に育っていることだけが心の支えだった」と続けました。それから紆余曲折あって29年、和田さんはくじらの博物館を離れました。

千葉に戻ってから、動物

と関わる仕事は諦めきれず、水族館やアニマルカフェに就きました。ただ、「好きだけど、何かが違う」と満たされない思いがあったそうです。

こうした中、後ろ髪を引かれるかのように、再びくじらの博物館に足を向けたのでした。そこには、豊かな自然の中でありのままに生きるクジラ、そして懸命に向き合う飼育員の姿が変わらずあったのです。その光景から、「喜一憂の満たされた日々を思い起こし、「自分はここで『クジラ』と真正面から関わりたいんだ」と、気持ちの整理がついたそうです。

現在、和田さんは鯨類の飼育員として9年目。リーダーとして多くの動物と向き合う日々。「クジラは自分にとって特別な存在。接する一瞬一瞬を大切にしたい。苦しい時だって、もう立ち止まってなにかいられない」と強いまなざしで語りました。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)

動物と接する一瞬一瞬を大切に